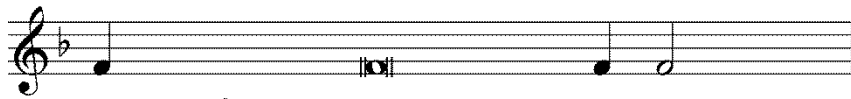


【 復活讃詞 第1調 】

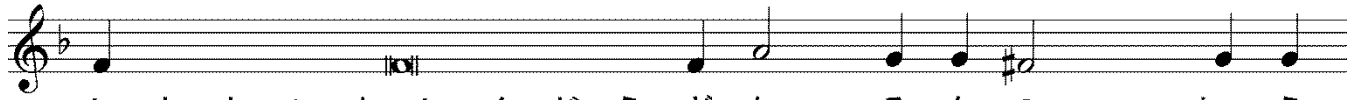
きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を
 救 世 主 人 墓
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を
 封 兵 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ
 守 時 爾 三 日 目 復 活
 し て 、 せ かい に い の ち を た ま え り 。
 世 界 生 命 賜
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の
 故 天 軍 爾 生 命 施
 し ゆ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は
 主 呼 光 榮
 なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む
 國 歸 獨 人 慈
 し ゆ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に
 主 光 榮 爾 慮
 き す 。
 歸

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

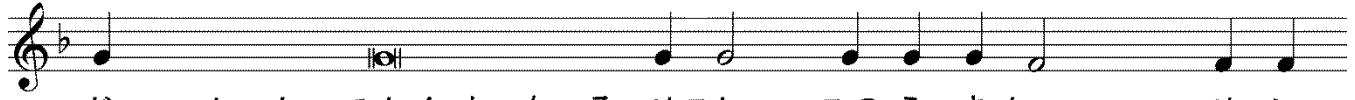
こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今



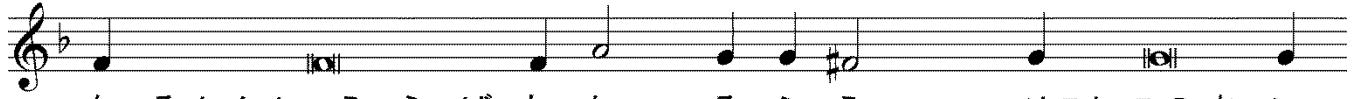
いつもよよに、アミン。
何時世世



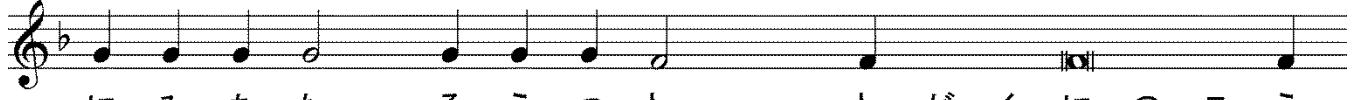
しととひとしくどうざなるものちゅう
使徒等同座者者忠



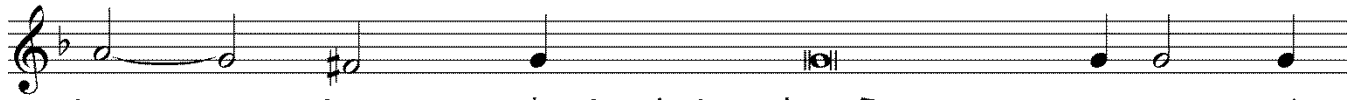
じつにしてしちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智役者聖



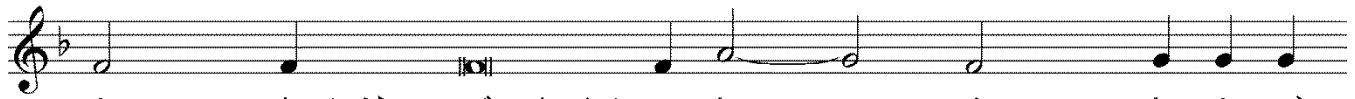
なるしにえられたるふえ、ハリストスのあい
神撰笛愛



にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器我國光



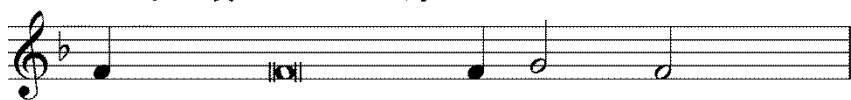
しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照お者使徒主教聖



よ、なんぢのぼくぐんのためあめ、および
爾羊群為天及



ぜんせかいために、いのちをたもうせい
全世界為生命賜聖



さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

司祭) (黙誦: ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

^{さんえい} ヘルヴィムより讚榮せられ、^{ことごと てんぐん ふくはい} 悉くの天軍より伏拝せられ、^{ばんぶつ む ゆう} 萬物を無より有と

^{ひと なんぢ ぞう しょう} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、^{よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、

^{ねがもの ちえ めいご あた つみ おこなもの す} 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、^{そのすくい たため つうかい} 其救の爲に痛悔

^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく ことき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖なるか神、聖なる勇毅、聖なる
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常生者我等を憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖なるか神、聖なる勇毅、聖
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常生者我等を憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖なるか神、聖なる勇毅、
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖なる常生者我等を憐
れめよ。こうえいはちちとこせいしん
光榮父子聖神

に き す、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 の 者 我 等

あ わ れ め よ 。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第1調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ、 わ れ ら なんぢを た の む が ご と く、
 主 我 等 爾 頼 如

な んぢの あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
 爾 憐 我 等 垂 給

え 。

誦經) ^{ぎじん} 義人よ、^{しゅ} 主の^{ため} 爲に ^{よろこ} 喜べ、^{さんえい} 讚榮するは ^{ぎしや} 義者に ^{かな} 適う、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢ を た の む が ご と く 、
主 我 等 爾 頼 如
な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われらなんぢ} 我等爾 ^{たの} を ^{ごと} 頼むが如く、

な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

【 使徒經 (アポストロス) 188 端 コリント後書 9 章 6 節～11 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{じん} コリント人に ^{たつ} 達する ^{しょ} 書の ^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{とぼ} 乏しく ^ま 稼く者は ^{とぼ} 乏しく ^か 穡り、^{ゆたか} 豊に ^ま 稼く者は ^{ゆたか} 豊に ^か 穡らん。人 ^{ひと} 各 ^{おの} 其 ^{おの} 心 ^{その} の
^{ほつ} 欲する ^{ところ} 所に ^{したが} 随い、^{うれい} 憂に ^よ 由るに ^{あら} 非ず、^し 強いて ^な 爲すに ^{あら} 非ずして ^{ほどこ} 施すべし、^{けだ} 蓋 ^{しかみ} 神は ^{たの} 樂
^{あた} みて ^{もの} 與うる者を ^{あい} 愛す。且 ^{かつ} 神は ^{なんぢら} 爾等 ^{しよ} を ^{おん} 諸恩に ^と 富ましめんことを ^{よく} 能す、^{なんぢら} 爾等 ^{つね} 常に ^{およ} 凡 ^そ の
^{こと} 事に ^{おい} 於て ^た 足らざるなくして、^{およ} 凡 ^{ぜん} の ^じ 善事を ^な 爲すに ^{ゆたか} 饒 ^{ため} ならん爲なり、^{しる} 録 ^{ごと} されしが ^{いわ} 如し、云く、
^{かれ} 彼は ^{さん} 散じて、^{ひん} 貧者に ^{ほどこ} 施 ^{その} せり、^ぎ 其義は ^よ 世 ^よ 世に ^{そん} 存すと。播 ^ま くる者に ^{もの} 種 ^{たね} を ^{あた} 與え、^{しょく} 食 ^{ため} の ^{パン} 爲に ^餅 餅
^{そな} を ^{もの} 備うる者は、^{ねが} 願わくは ^{なんぢら} 爾等 ^{また} が ^{たね} 播 ^{そな} くる種 ^{かつ} を ^{ふや} 備え ^{また} 且 ^{なんぢら} 殖 ^ぎ し、^み 又 ^ま 爾等 ^の の ^義 の ^實 實を ^{さん} 益 ^{こと} さん ^を ことを、
^{なんぢら} 爾等 ^{およ} が ^{こと} 凡 ^と の ^よ 事に ^{ひろ} 富むに ^{ほどこ} 由りて、^え 博 ^{ため} く ^こ 施 ^{われ} す ^よ を ^{かみ} 得ん ^{たて} 爲 ^{まつ} なり、此れ ^る 我 ^る 等に ^る 由りて ^る 神 ^る に ^る 奉 ^る る

かんしゃ な
感謝を作す。

(比較用 口語訳) 少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりでである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世に

^{た もの われなんぢ な うた} 垂るる者よ、我爾の名に歌わん、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いぎぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ}畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書17端 5章1~11節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とき みづうみ はまた ふたつ ふね みづうみ}謹みて聴くべし、彼の時イイス、ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二の舟の湖
^{あ み ぎよしゃ ふね はな あみ あら かけ ぞく ひとつ ふね のぼ}に在るを見たり、漁者は舟を離れて網を洗えり。彼はシモンに屬する一の舟に登りて、
^{すこ きし はな こ ぎ ふね たみ おし かた おわ い}少しく岸より離れんことを請い、坐して舟より民を教えたり。語り竟りて、シモンに謂え
^{ふか ところ うつ あみ おろ すなどり こた い ふうし われよもすがら}り、深き處に移り、網を下して、漁せよ。シモン對えて曰えり、夫子よ、我終夜

ろう う ところ しか なんぢ ことば よ われあみ おろ すで これ おこな
 勞して、得る 所 なかりき、然れども 爾 の 言 に依りて、我 網 を下さん。既に之を 行
 いて、魚 を圍めること 甚 多く、網裂くるに至れり。乃 他 の 舟 に在る 侶 を招きて、來
 り 助けしむるに、彼等 來りて、魚 二 の 舟 に物ちて、幾 ど 沈まんとせり。シモン ペトル之
 を見て、イエスの 膝 下に伏して曰えり、主よ、我 を離れよ、我 罪 人 なればなり。蓋 彼
 およ かれ とも あ もの みなすなど うお ため はなはだおどろ とも
 及び彼と 偕 に在りし者は、皆 漁 りたる 魚 の爲に 甚 驚 けり、シモンの 侶 たりしぜヴ
 エデイの子イアコフ 及びイオアンも 亦 然り。イエス シモンに謂えり、懼るる 勿れ、今より
 のちなんぢひと すなど かれらふね きし ひ いつさい す かれ したが
 後 爾 人を 漁 らん。彼等 舟 を岸に曳き、一切 を捨てて、彼に 従 えり。

(比較用 口語訳) イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのを
 ごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、イ
 エスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお
 教えになった。話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。
 シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、
 お言葉ですから、網をおろしてみましよう」。そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れ
 がはいて、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をし
 たので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。これを見て
 シモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わた
 しは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびただしいのに驚いたからである。
 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言わ
 れた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き
 上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ